

Newsletter 37

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第37号/2020年11月30日発行

Contents

- 巻頭言 コロナウイルスと差別
- 特集Ⅰ 「コロナ禍と教養」
- 特集Ⅱ 【教養研究センター設置科目】アカデミック・スキルズ/身体知
 生命の教養学/身体知・音楽/日吉学
- 特集Ⅲ 「庄内セミナー」「アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ」
- 特集Ⅳ 「情報の教養学」「日吉キャンパス公開講座」
- 活動予定 2020年8月～12月
- 私の〇〇自慢



社会的距離：スイデンテラス（鶴岡市）での東山昭子さんと（右）と鈴木亮子所員の対談

コロナウイルスと差別

教養研究センター所長
小菅隼人（理工学部）
Hayato Kosuge

9月初旬のこと、同居の息子が熱を出し会社を休みました。ホームドクターは、解熱剤などを出し、3日ほどの間に快方に向かわないようであればPCR検査を受けるようにという診断を下しました。その時、私は、鈴木亮子先生、大古殿事務長と共に鶴岡にいました。今年中止とした庄内セミナーを、映像によるインタビューによってフォローアップする試みのためです。鈴木亮子先生は東山昭子さん（郷土文学研究家）と大和匡輔さん（鶴岡シルク株式会社代表取締役）、私は酒井忠久さん（旧庄内藩主酒井家18代当主）との対談・映像収録を終えて、東京に帰る直前、庄内空港で、その連絡を家内からもらいました。

首都圏のコロナウイルス感染者についてはやや落ち着きを見せていた時ではありましたが、鶴岡では、数か月の間、感染者が出ていないと聞いていましたし、高齢の方との対談ですので、社会的距離、自分自身の体調にはかなり気を遣っていました。しかし、まさか、家族が私の出張中に体調を崩すとは思いませんでしたので随分と慌てました。もし、息子がウイルスに感染していれば、私は濃厚接触者ですから、庄内で会ってくださった方々にも、同行のお二人にもお伝えし、人との接触に配慮をお願いしなければなりません。それは早い方がいいと帰りの飛行機の中で心が決まり、そのため、ホームドクターに無理を言って、翌朝、息子

にPCR検査を受けさせました。6時間後、陰性という結果が出て、その夜から息子の体調もケロッともとに戻り、心からほっとしました。単なる夏風邪だったようです。

私の心配の大部分は、濃厚接触者である自分が、教養研究センターが長年お世話になり、また、個人的にも親しくしてくださっている庄内の方々、とりわけ、高齢の東山さんや酒井さんを感染者にさせてしまうことでした。正直に言って、息子の体調の方は、仮に感染していても、もともと健康な20代ですから全く心配にならず、私の心配はひたすら自分が感染源になること、そして、その結果としての、教養研究センターの社会的責任でした。

しかし、よく考えてみれば、これはかなり異常な事態だと思います。COVID-19の引き起こしている恐怖は、病気に罹ることよりも、人に感染させること、そして、人や社会から分断されることの恐怖です。少なくとも現在の日本では、コロナウイルスに感染した人々は、物理的にも精神的にも社会から隔離されます。COVID-19の実体については科学的には未知であるにもかかわらず、恐怖心だけが膨らんでいる結果です。これは「差別」の構図と同じではないでしょうか。

新型コロナウイルス感染症を克服するためには、医学的側面と同じくらい、社会的・心理的側面に努力が割かれなければなりません。つまり、教養の出番なのです。私は、「教養」は「繋がり」と「広がり」をその本質とすると考えていますが、新型コロナウイルス感染症は、逆の方向に働く極めて悪質なサタン（悪魔）の技でありましょう。それを退けるための知恵を大学は真剣に探究し、実践しなければならぬと強く思っています。

コロナ禍と教養

コロナ禍と未来学的教養の時代

1970年、大阪で日本万国博覧会が開かれました。未来志向の万博で、近い将来の暮らしを予想するかのよう展示館がとて多かったです。その中に当時の日本電信電話公社が最先端の通信技術を紹介するパビリオンがありました。電気通信館です。目玉はテレビ電話。お互いが画面を見ながら会話できる。当時小学1年生だった私は、実はそんなに驚きませんでした。幼稚園の頃に観ていた子供向けのSFテレビ番組『ウルトラセブン』や『空中都市008』の世界では、テレビ電話が当たり前で用いられていたからです。その頃、大人たちに「高校生になる頃は学校に行かなくてよくなる」と言われました。大画面のテレビ電話で、授業も、会社の会議も、病院の診察すら、行われるようになる。さらには家庭に置かれた端末で、世界中の書物や新聞の必要な頁が入手できるようになる。子供向けの未来学の本にもそういうことが書いてありました。通勤も通学も必要ない。南極でも月面でも住みたいところに住めばいい。そんな話を真に受けていました。

ところが、いつまで経ってもそうはならなかったのです。確かに通信技術は長足の進歩を遂げたのに。1970年の時点では必ずしも予想されていなかった、個人が小型化された電子頭脳を携帯できるという技術革新もなされたのに。そうした条件が整っても、都会に密集し、満員電車で詰め込まれ、学校や会社に通う暮らしが続きませんでした。人間は社会的動物であり、その社会とはヴァーチャルには馴染まず、現実空間を密に共有しないと成り立たない。動物としての生の欲求が満たされない。そういうことだったのでしょ。子供の頃に聞かされた未来は幻とっていました。

そうしたら俄かにそんな未来がやってきたのです。この未来は一時的幻影でしょうか。いや、人間の文明が必然的に進む方向に、動物としてのさががブレーキをかけてきたのだけれど、ついにコロナ禍が背中を押してしまったのだと、私は思います。多少の反動はあるでしょうが、元に戻ることはもうないのではありますまいか。幼少年期に大阪万博風の未来学的教養を植え付けられた者の戯言でした。(片山杜秀)

コロナウイルスと教養

コロナウイルスが世界的大流行をする中、感染症の歴史に関する文章を依頼され、少し調べてエッセイを書きましたので、そこから一つ紹介します。

2020年の春に、アメリカ合衆国やヨーロッパの食肉加工工場で、牛肉、豚肉、鶏肉が加工される労働の空間で、患者のクラスターが次々と現れました。イギリスの新聞『ガーディアン』によるとアメリカでは約300の工場で3万6000人の労働者がコロナウイルスに感染し、100人を超える死者が出たとのこと。それ以外にも各国で大きな被害が出ています。食肉加工をする工場の空間は密閉されており、そこで長時間の労働に携わるため、ウイルスが広がって感染が大きくなるとのこと。食肉加工労働には移民が携わることが多く、悲惨な状況が報道されていました。

1880年頃にタイムスリップをすると、アメリカで同じような現象が起きています。場所はシカゴなどの当時大都市になった地域です。そこで食肉加工産業が近代化されました。動物が食肉専用選ばれ、生産が合

理化されました。豚からヒトに感染する感染症がヨーロッパではすでに特定されており、その問題をアメリカが解決して生産された肉を国際的に輸出できるようになりました。その一方で異様な現代化も進みました。畜殺は合理化され、動物の死体は大量に効率的に工場に運ばれました。労働者たちは移民、居住空間は悲惨でした。労働現場では、畜殺されて運び込まれる大量の動物の死体から食肉製品を生産し、動物の血にまみれて仕事をするという異常事態でした。これを批判してラドヤード・キプリングが文章を書き、アメリカのアプトン・シンクレアが1904年に小説『ジャングル』を書いて食肉加工工場を批判しました。

農業革命の近代化の達成と、現代化と呼べる血と動物の死の異様な空間と移民たち、そしてそれを描く文学。このような自然科学と人文社会科学が接続する構造があったことを、100年以上の時間を超えてあらわにしたパンデミーでした。

(鈴木晃仁)

コロナの時代の愛、大学

金原ひとみさんの最新作は、コロナの時代の愛を描く『アンソシヤル・ディスタンス』（「新潮」2020年6月号）でした。大学四年生、希死念慮を持つ彼女、弱さゆえにそれを共有する彼。どこにでもいる学生カップルですが、コロナ禍のあおりで彼女は就活が進まず、彼は就職が決まるも将来に希望を見いだせません。楽しみにしていたライブの中止が決定打となり、二人は鎌倉へ心中旅行に出、若者らしい無邪気さで明日なき飲食と性に耽ります。つまり、来るべきロックダウンが奪うであろうフィジカルな体験に——2003年のデビュー作『蛇にピアス』からひき続き、しかしコロナの時代を映したアンソシヤルな身体体験を描く作品とまずは受けとることができます。

物語が彼女の中絶手術からはじまるとおり、二人は避妊をしていません。対して今般、ソーシャルな身体体験においては、フェイスガードからパソコン、スマートフォンのモニター画面に至るまで皮膚^{スキン}の仲介がその条件となりました。彼女は実社会でも皮膚^{スキン}越しのコミュニケーション、たとえばZoomでの就活面接を苦手とし、そのために社会参入ができません。デジタル化可能な視聴覚情報のみを通過させ、言語化できない皮膚^{スキン}感覚の共有を阻む第二の皮膚^{スキン}。畢竟、21世紀の感染症拡大が浮き彫りにしたのは、それ以前からこの

＜透明な衝立＞によってますます深化していた現代人特有の孤独なのだと思考します。テクノロジーとパンデミックの協働は、偶然というにはあまりに見事なものでした。

一方で大学。小中高生に比べて言語化が進んでいる学生を相手にしている以上、そんな衝立越しでも知の伝達は可能だと思われれます。もちろんそれでもフィジカルな体験は必要で、それも、ただ発話すれば済むということではないでしょう。オンデマンド教材を準備していると、教室とは、記号に還元できないノイズが渦巻く場であり、それが言表行為をなしていたのだと改めて知ります。とはいえ性愛と違い、私たちが媒介にできるのがつまるどころ言語であることに変わりはありません。フランスのとある精神科医は〈身体の皮膚〉と自我、つまりは〈心の皮膚〉との相関性を指摘し、その傷を修復できるのは言語だとしました。身体のリアルを問い続ける作家はソーシャルという抑圧に対し、アンソシヤルな愛を描いて思索を誘いました。そして大学人には大学人の言語があるはずで、皮膚感覚の共有に課された禁忌によって、誰しもの〈心の皮膚〉が脆弱になるなか、私たちが透明な皮膚^{スキン}越しに送れるものの力を沈思しながら授業の吹きこみをする日々です。

（新島 進）

《教養》は何度も新しく立ち上がる

教養研究センターと高等学校（以下、「塾高」）で2019年度から新たに始まった「教養の一貫教育」は、詩人の吉増剛造先生を招聘して幕を開け、第2回を越劇、第3回は雪雄子さんによる舞踏ワークショップと、教養研究センターの協力のもとで初年度から多彩なプログラムが用意されました。

今年度は6月に吉増先生と空間現代とのコラボレーションを嚆矢に着々と企画が進んでいました。後期には大林宣彦監督をお呼びして、こういう時代だからこそ戦争について映画について縦横無尽に語ってもらおうと思っていたのですが、残念ながら緊急事態宣言のさなか最初に届いたのが監督の訃報でありました。「教養の一貫教育」構想段階のときからあたためていた企画でもあり、余命宣告を受けてなおみずみずしく渾身を賭して映画製作に懸けておられる監督をまえに3年間逡巡して出せずに手許に残った手紙を、わたしはこの間何度も家で読み直しました。

塾高でも新しいツールが使用され、困難なときに新しい方法を見つける同僚の力に深く敬意を払います。同時に、羊皮紙のように消すことや上書きを前提とする黒板や喋ったそばから虚空に消えていく口頭授業と

いうメディアに好意がある一方で、消せないオンライン掲示板や録画の授業にはいささかの気恥ずかしさもあり、馴れるまでは滑稽にもフランス語とその翻訳という二重言語で書き込んだりしていました。もちろんそれは旧来がよくて新しいメディアがだめだというわけではまったくなくて、そうすることでわたしたちが学校空間で〈失ったもの〉と〈得たもの〉をより明らかにしていけるように思ったからです。

後期の塾高は一転授業時間確保と安全のため、運動会、講演会、球技大会、文化祭など特別活動は行われず、ひたすら授業だけが繰り返行われています。そこには日常に変化をもたらす別の空気が介在する余地はありません。今年ほど強制ではなく自由に立ち上がる〈場〉の重要性を感じる年もあります。それは「教養の一貫教育」の重要性が確信に変わった瞬間でもあります。わたしたちが生きていくうえで《教養》こそ欠かすことのできないエートスであり、空気を豊かに輻輳化するものです。

《教養》は何度も新しく立ち上がる。コロナ禍においても「教養の一貫教育」もあたらしい装いで立ち上がります。そうしなければならないと思います。

（古川晴彦）

2020年度 教養研究センター設置科目

科目名	学期・曜日・時限	開講／休講	
アカデミック・スキルズⅠ—知の基礎を築く— (英語版)	春 火 5	Ⅰ (春学期): 休講 Ⅱ (秋学期): 開講	
アカデミック・スキルズⅡ—知の基礎を築く— (英語版)	秋 火 5		
アカデミック・スキルズⅠ—知の基礎を築く—	春 水 5		
アカデミック・スキルズⅡ—知の基礎を築く—	秋 水 5		
アカデミック・スキルズⅠ—知の基礎を築く—	春 木 5		
アカデミック・スキルズⅡ—知の基礎を築く—	秋 木 5		
アカデミック・スキルズⅠ—知の基礎を築く—	春 金 5		
アカデミック・スキルズⅡ—知の基礎を築く—	秋 金 5		
身体知—創造的コミュニケーションと言語力—	春・特定期間集中		開講
生命の教養学—記憶—	春 金 3		休講
身体知・映像Ⅰ—物語を読む、見る、映像化する—	春 月 5	休講	
身体知・映像Ⅱ—物語を読む、見る、映像化する—	秋 月 5	開講	
身体知・音楽Ⅰ—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—	春 火 5	休講	
身体知・音楽Ⅱ—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—	秋 火 5	開講	
身体知・音楽Ⅰ—古楽器を通じた歴史的音楽実践—	春 土 2	開講	
身体知・音楽Ⅱ—古楽器を通じた歴史的音楽実践—	秋 土 2	開講	
日吉学—日吉と戦争—	春 火 5	開講	

アカデミック・スキルズ

センターの設置科目の柱とも言うべきこの授業は、論文執筆とプレゼンテーションを2本柱とし、通年履修を原則とします。教員との密接なコミュニケーションを保ちながら、毎週のように宿題が課される、厳しい授業です。例年ですと、対面でガイダンスを行ない、意欲ある学生を選考し、それでも残念ながら脱落者が多く出てしまうのが常。オンラインで、選考も出来ず、学生のモチベーションを1年間保ってゆけるかどうか。そのためのノウハウもなく、しかもこの授業を初めて担当する教員も多い。春学期は無理だろうと判断し、秋学期に懸けることにしました。教員にベテランが揃う日吉学のような積極策を取らなかったことが適切であったかどうか、深く考えるところです。秋学期は、大学が対面授業も可とする中で開講していますが、感染防止の観点からオンラインを主とし、試行錯誤の日々です。論文を書きさける学生がどれだけ出てくれるか。教員の力量が問われています。(片山杜秀)

身体知・音楽

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」は、2020年度においても従来通り、株式会社白寿生科学研究所からの寄附による寄附講座として2つの授業が開講される予定でした。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」でした。しかしながら、新型コロナウイルス感染症拡大により春学期は、器楽クラスが完全オンラインとなり合唱の授業は休講となりました。前者では、個々の履修者に対しての個別指導は、ある程度充実させることができました。しかしながら、複数人数が同時に楽器をオンライン上で演奏することは、特殊な機材、ソフトウェア、そしてインフラがないとできないということを改めて認識させられました。器楽クラスは、個別レッスンではなく、合奏を核とした授業なので、この観点からはある程度不十分な結果となってしまいました。なお、秋学期においては、楽器、そして合唱の両クラスを、通常の授業形態で開講しています。

(石井明)

生命の教養学—休講にあたって

3月後半以降、刻々と変わる流動的な情勢下で関係各所との協議を重ね、出講日程の再調整や秋学期への延期、オンライン開講などさまざまな可能性を検討しましたが、最終的に今年度の休講という苦渋の決断に至りました。多くの外部講師の「招聘」で成り立つ本講座の場合、どのような変更であれ、まずは各講師の事前承諾を得る必要があります。万が一そこで辞退者が出れば、代講や講義回数削減によって帳尻を合わせなくてはなりません。同じテーマと布陣では二度と開講できない「一点もの」の授業だからこそ、急拵えの消化試合にはしたくないという強い思いがありました。学生の履修機会を奪わないという大学の方針は重々承知したうえで、「記憶」という今回のテーマを遠隔であってもより練度の高い授業として実現することを期しての判断であり、幸いにも関係者の皆様からはご理解を賜りましたが、今後のめどはいまだに立たず、模索の状況が続いています。(西尾宇広)

教養研究センター設置科目



世界を覆う疫病禍。教養研究センターの歴史もたいへんな時代と重なってしまいました。センターの設置科目は、参加型で、双方向型で、密なコミュニケーションを要し、体を動かし、楽器を演奏し、声を出して歌う、といったものばかり。開講できるか、できないか。科目によって対応が分かれました。中では、いちちはやく危機的状況に対応した日吉学の成果が光ります。

(片山杜秀)

対面式より充実!? : 日吉学のオンライン授業の取り組み

早々にコロナ禍に伴い授業を開講しない方針の問い合わせがあり、正直困惑しました。授業は開講するものです。江戸が戦火に見舞われた中でも学問を講じ続けた義塾の福澤精神はいずこへ。開講を決断し、急遽作成した学生へ「檄文」を教養研究センターのWebで公開していただきました。檄文を見て参加した学生もおり、塾生新聞も注目してくれたのは嬉しい限りです。体験を重視するはずの日吉学がオンラインで開講しました。

日吉学の特色の一つは文系・理系にとらわれない多面的視点から物事を捉える場を提供することです。2020年は終戦75年、「海軍司令部の地下壕はなぜ日吉台に建造されたのか」を共通テーマに、慶應義塾の歴史、日吉の森の地形や地質、戦争遺跡の保存のあり方、沖繩戦と日吉の司令部の関わりなど様々な分野から、掘り下げました。学生は前日に公開される講義と資料で事前学習、当日はネット環境に左右されにくいチャットで60分間議論をし、Googleフォームによってその日のキーワード3点を返送し、最終レポートのテーマ絞りの準備を進めてもらいました。チャッ

夏の身体知—初めてのオンライン授業

2020年度はコロナウイルスの蔓延により、通信教育部の夏季スクーリングもオンラインとなりました。誰もいないキャンパスで、かえって身体知の授業は、距離をとって行えば可能となるか、と思いましたが、許可されませんでした。しかしこのような状況だからこそ、他者とつながる「身体」を意識できる授業が必要だと考え、オンラインによる集中型授業の開催に踏み切りました。

オンライン授業に切り替わったことで、開講日までに3分の2の通学過程の学生が履修を取り消しました。それでも残った4名の1年生と通信教育課程の7名によるクラスは、毎日が発見の連続でした。授業はアメリカの詩人、E. E. カミングスの詩、「今はちょうど」から開始。春の明るい光景の裏に潜む暗い世界に気が付くと、読み方は変わってくるだろうか、という「声」の発見から始め、続いて、詩人の朝吹亮二氏の未発表作品「絵本のための断片」6篇を読み、気に入った詩をそれぞれ絵画にすることで、言語の世界を広げていきました。ちょうど終戦記念日のこ

【日吉学】離れて出会えた「学びの神殿」

不思議な日吉8年生の春学期でした。今まで、これほど長い間日吉から離れたことも、今ほど日吉を身近に感じたこともありません。

毎週、先生の資料からバーチャルで日吉に降り立つ私は、時間も空間も自由に操れるフィールドワークに出ます。貴重な史料との出会いから食パンを使った実験まで、刺激的な学びばかり。

しかしこれは日吉学の楽しさのプロローグ。本編はチャットです。各分野のエキスパートの先生方と多様なバックグラウンドを持つ学生、双方が白熱させる議論に飛び込みます。新たな知識や考えに出会い融合させる、非常に贅沢な時間でした。

日吉学は学問や学生生活への眼差しを変えます。

「ただの丘」としか思っていなかった日吉は、今の私には「学びの神殿」です。(法学部2年 宮崎将)

トは担当回の教員が中心になるものの、学生の知識欲はどこに向かうか予測不能。ときには8名の教員総がかりで質問に応え、文献やデータ情報を提供。議論や質疑が同時に複数進行し、知的にヒートアップ、制限時間を超えることもしばしば。Zoomによる中間発表会ではテーマの発表と質疑を受け、さらに最終発表会では教員や学生からの一斉質問。さらにレポートを改訂・完成してもらうという段階をふみました。最終日に学生から「日吉という題材からこれほど幅広く考えられるのが新鮮な驚き」「アメリカの大学にありそうなアクティブな授業で楽しかった」「異なる見方の人の意見に触れられ刺激的で思考の訓練にもなり大満足」という感想が寄せられました。Virtualな日吉をRealに語ってくれた学生さん、Realにしてください先生方に謝意を表したいと思います。

(不破有理)



塾生新聞5月号より

ろということもあり、戦争につなげて絵を描いた参加者もいれば、詩から読み取れる自然の力を描いた参加者もあり、参加者はたくさん刺激を交換し合いました。そこから今度は自分の思い出や心象風景を詩にしてみます。それぞれの心象風景を他者が読むという経験を経ると、自らが書いたものの世界もまた異なって見えてきます。最後に取り上げた教材は、ジョー・ミノの「囁く高麗鶯だったあの子」です。短いながらも、言葉にできない個人の思いや哀しみを国家という抗えない力に象徴を使ってぶつけるこの作品を解釈し、朗読劇を作りました。最終日には外部からの観客もオンライン上にお招きして、ジョー・ミノの作品と各自の心象風景を基にした朗読劇を披露しました。今年も朗読のみならず、ヒップホップや絵画と盛りだくさんの内容となりました。

オンラインによる身体知は初めての試みでしたが、各自の声に個性がにじみ出て、その身体性に合わせた解釈や創作、そして創造力を活かした演出が可能となったことは本年度の夏の身体知の大きな収穫でした。(横山千晶)

【身体知】詩の世界に身を投じた6日間

「身体知」の授業は、私の想像力に翼を与えてくれました。朗読や描画、身体表現を通して詩の世界観を思い描くことに没頭するうちに、詩の言葉一つ一つに魂が宿り、まるで自分が重層的な詩の世界を生きているかのように感じられるようになったのです。最終発表会では、受講生の方々との画面越しであることを忘れてしまうほど白熱した話し合いを経て、オンラインという環境を活用して工夫を凝らした映像作品を共有することができました。

作品について思いを巡らすことはあっても、その内なる思いを全身全霊で表現することを躊躇していた私にとって、多彩な表現に心揺さぶられ、自分の殻を破ることができたこの6日間は、かけがえのないものとなりました。

(文学部1年 西潟瑞葵)

「庄内セミナー」2020 特別バージョン

例年8月下旬から9月初めに山形県鶴岡市で、市役所のご協力のもと「庄内に学ぶ生命（いのち）」というテーマで、講演、参加者同士の議論、論語素読や修験体験などをおして生と死を考える庄内セミナーは、今年度は4月早々に中止を決定しました。少人数の学生と日吉で講演会を…という案も出ましたが6月の委員会でも見送りました。感染者数の不穏な増減を思えばやむを得ませんでした。

しかし転んでもただでは起きないのが小菅教セ所長です。学生を引率できなくても、限られたスタッフで現地へ赴いて、講師の先生方にお話を伺い動画を作成してはどうかと提案されました。そこで現地と頻りにやりとりし、小菅所長、大古殿事務長、そして幻の第11回委員長鈴木木の3名で9月7日から10日まで庄内に伺い、3名の皆様の講演を撮影させていただきました。

一番手は毎年朗らかに庄内文化の豊かさとだだちゃ豆の美味しさを教えて下さる郷土文学研究家の東山昭子先生でした。坂茂氏設計のスイデンテラスで、黄金

色の水田と鷺をバックに東山先生は「庄内に生きた女たち」についてお話下さいました。それは自己研鑽と社会貢献を両立させた過去の女たちの話ではなく、今日の東山先生のお姿に繋がるものでした。

酒井家18代当主で致道博物館館長の酒井忠久様には、館内の旧庄内藩主御隠殿で庭園をバックに、酒井様の幼少期からの成長の軌跡や、過去から未来へと続いていく庄内への思いを、小菅所長との一問一答形式でお話頂きました。よそ者だからこそ聞けた質問もあると思います。庭園の楓が早くも少し色づき、息をのむ美しさの中での対談でした。

鶴岡シルク株式会社代表取締役の大和匡輔様には松ヶ岡開墾場でお話を伺いました。先人たちの苦勞の末にシルク産業拠点として発展した松ヶ岡の歴史をご説明頂き、来たる循環型経済を支えるシルクの可能性について熱く語って頂きました。

難しい状況の中、今回の撮影にご協力下さった鶴岡の皆様へ深く御礼申し上げます。（鈴木亮子）

アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ

アカデミック・スキルズでは、自分で問題を発見し・調べ・発信する力を1年にわたって実践的に習得します。その心得を誰でも学べるよう、センター所員がテーマを設けて約10分語るビデオ講義を制作し、ホームページを介して公開しています。2013年度に一度一連のものが作られましたが、内容・陣容を刷新することとし、新たに6点が制作され、本年度初めに公開されました。本年度中に9点が追加される予定です。旧版にもホームページからアクセスできます。学生諸子にとってレポートや卒業論文執筆の参考になるとともに、広く一般に学術研究に臨む姿勢について、指針となるのが期待されます。また、リモート学習に資する教材ともなります。学外からも関心が寄せられ、参照の打診を受けています。

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/culture/academic.php#movies>

（高橋宣也）

<アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ>

2020年度版

- 「研究とは何か？」 小菅隼人（理工学部 教授）
- 「文献を読む」 片山杜秀（法学部 教授）
- 「翻訳について」 高橋宣也（文学部 教授）
- 「レポートの問いの立て方」 鈴木亮子（経済学部 教授）
- 「剽窃について」 池田真弓（理工学部 准教授）
- 「効率的に情報を探すには」 竹田咲子（日吉メディアセンター）

<今後の配信予定>

- 「読書術」 坂本 光（文学部 教授）
- 「君も哲学してみないか——哲学的思考法」
斎藤慶典（文学部 教授）
- 「調査的面接法の基礎——質的手法への誘い」
高山 緑（理工学部 教授）
- 「Persuasive English Presentations: Three Is the Magic Number」 アダム・コミサロフ（文学部 教授）
- 「言葉は身体表現——英語という言語を捉えなおす」
横山千晶（法学部 教授）
- 「ドイツ語を知り、日本語を知る——大学生の語学」
杉山有紀子（理工学部 専任講師）
- 「教養の語学——フランス語」 原 大地（商学部 教授）
- 「中国語——発音の攻略」 高橋幸吉（商学部 准教授）
- 「図書館資料と著作権」 今井星香（日吉メディアセンター）

「情報の教養学」

春学期はCOVID-19で中止、秋学期は？

2020年度春学期の「情報の教養学」の講演は、残念ながら、中止となりました。当初はオリンピック開催の年のため、オリンピックに関わる講演を3件開催する予定でした。しかし、3月に入ると新型コロナウイルスがどんどん広がり、講演に参加される学生、講演者ご自身、スタッフの安全を考慮し、3月後半に春学期の講演をすべて中止する決断をいたしました。

個人的な話で恐縮ですが、私自身3月の学会活動に大きな影響を受けました。3月の頭に国内会議の現地開催が中止となり、中旬のアメリカでの国際会議は私の発表の4時間前に急遽中止となりました。その間に、3月末開催予定だったヨーロッパでの国際会議の延期連絡がありました。1000人規模の会議と数十名規模の講演では桁の違いがありますが、このような経験をしてきたため、春学期の講演中止の決断に迷いはありませんでした。

「情報の教養学」の講演は中止しましたが、大学の

講義はオンライン開講で春学期を終えました。オンライン（ライブ授業およびオンデマンド授業）に関する利点・欠点は、学内外からいろいろと聞いています。オンライン授業そのものは（意外と）評判がよかったが、そのためにコンピュータに向かっている時間が長く、課題の量が多いという問題をよく聞きます。

このような状況のため秋学期の「情報の教養学」は、3密を避けるため、キャンパス内で「情報の教養学」の講演を実施しません。学生がコンピュータに向かう時間を増やし、課題のため時間がとりにくいかもかもしれませんが、情報に関わる話を聞く機会を提供するという意味で、オンデマンドで講演を配信します。10月20日より、次のページから弁護士の福井健策先生による著作権に関する講演を公開しています。ぜひご覧ください。

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/talks/fukui-kensaku-2020/>

（高田眞吾）

「日吉キャンパス公開講座」の中止にあたり

本来であれば、前身となる「横浜市民大学講座」（第一回目を昭和55年に開催）から数えて47回目の日吉キャンパス公開講座を2020年度に開催する予定でしたが、事前の準備のために少なくとも4月の段階で決定する必要があり、開催の可能性と手段について模索し慎重に議論を重ねて参りましたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大により、やむなく中止の運びとなりました。

これまでに1度たりとも開催できなかった年度はなく、中止は苦渋の決断でした。ですが、ただ中止とするのではなく、これまでにご参加いただいた受講生の皆様に、中止の旨と、前年度に開催の公開講座のテーマ「出口戦略とその先の未来」に沿った内容で、教養とは何かを改めて問うような形での通知を郵送させていただきました。その内容の一部を右に抜粋いたします。

（以下抜粋）

昨年度の公開講座は「出口戦略とその先の未来」という統一テーマの下に実施致しました。今回の世界的な事象が、コロナ後の、或いはコロナと共にする世界でどのように生きるべきか、つまりコロナ後・コロナ禍の出口戦略について、考えさせられる機会となったのも事実です。

何が違って何が変わらないのか。そのために私達が個々にできることとは何か。講座の説明文の中で「ある事象をどう終わらせるか、終わった後どうすべきか。出口を迎えるにあたって、それまでに培ったことを派生させ、どのように備え次を迎えるか」と記述させていただきましたが、まさにそのような瞬間を迎えている気もしております。

次年度以降については、例えば、オンラインとオフラインの組み合わせ（オフラインは人数を絞り、同時に中継するなど）を検討しております。

（寺沢和洋）

【学会・ワークショップ等開催支援】オンライン連続講演&討論会:日露の美術工芸交流とマトリョーシカ
第1回「マトリョーシカ日本起源説をめぐって」
熊野谷葉子

8月22日(土) 14:00~16:00、Zoom

【基盤研究】文理連携プロジェクト「医学史と生命科学論」
第1回「感染症の基礎知識」
大西和夫

10月9日(金) 16:30~18:30、Zoom

【HAPP】ライブラリーコンサート2020

10月21日(水)、10月23日(金) 15:00~
日吉メディアセンター、同時LIVE配信(YouTube)

【基盤研究】文理連携プロジェクト「医学史と生命科学論」
第2回「Covid-19のパンデミックと食肉の問題」
鈴木晃仁

11月6日(金) 16:30~18:00、Zoom

【学会・ワークショップ等開催支援】シンポジウム
「プーストと世界文学——自分だけのズーム、テイク1」

11月14日(土) 10:00~12:00、Zoom

【研究の現場から】第28回: 縣由衣子
「ミシェル・セールの初期思想——複数の結び目を作る」

11月18日(水) 18:15~20:00、Zoom

【学会・ワークショップ等開催支援】オンライン連続講演&討論会:日露の美術工芸交流とマトリョーシカ
第3回「山本鼎の農民美術とロシア」
小笠原正、中村喜和

11月21日(土) 14:00~16:00、Zoom

【研究の現場から】第30回: 石田真子
「知覚的補完: 錯聴と空耳の科学——騙される脳——」

12月23日(水) 18:15~20:00、Zoom

8月

9月

10月

11月

12月

【学会・ワークショップ等開催支援】オンライン連続講演&討論会:日露の美術工芸交流とマトリョーシカ
第2回「ロシアの工芸とジャポニズム ミハイル・ヴルーベリを中心に」
上野理恵

9月22日(火・祝) 14:00~16:00、Zoom

【情報の教養学】秋学期オンデマンド式講演動画: 福井健策
オンラインを生き抜く著作権

その1: とりあえず著作権の初歩を30分でマスターする

その2: 動画配信・オンラインイベントを使いこなす

その3: パクリと二次創作の境界を探ってみる

10月20日(火) 配信開始

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/talks/fukui-kensaku-2020/>

【選書刊行記念企画】著者と読む教養研究センター選書
第1回: 理性という狂気——G・バタイユから現代世界の倫理へ
石川学

11月2日(月) 16:30~18:00

①対面参加(40名まで) 来往舎1階シンポジウムスペース
対象: 塾生・慶應義塾 教職員

②オンライン参加(Zoom) 対象: どなたでも可

【HAPP】新入生歓迎講演会〈物語の世界〉no.6
響きつづける「声」のものがたり

いしいしんじと聴く『義経千本桜』『源氏物語』

11月28日(土) 14:00~16:00、Zoom

【研究の現場から】第29回: 石川大智
「英国唯美主義と好奇心」

12月9日(水) 18:15~20:00、Zoom

【基盤研究】文理連携プロジェクト「医学史と生命科学論」
第3回「感染のリスクと科学技術」見上公一

12月11日(金) 16:30~18:30、Zoom

【庄内セミナー】ミニレクチャー(動画配信)

日程未定、YouTube公開(アドレス未定)

私の(健康法)自慢

➤ の数年、肌寒くなる季節になるとはまっていることがあります。山小屋での暖炉です。北欧ではパチパチと燃える暖炉の炎だけを放映するTV番組が人気と聞きます。炎のゆらぎには癒し効果があるそうです。ですが市販の薪束では一瞬で燃え尽き、購入価格もなかなかのものです。それならばと始めてみたのが薪割りでした。

剣道部時代(ほぼ幽霊部員でしたが…)に習った「心技体の一致」を思い出しながら、心を無にして斧を振り上げます。薪に当てる瞬間、斧をぎゅっと絞ります。意外と力はいりません。見事スパッと割れた時の快感、全身運動の心地よさ!

なんとこの薪割り、最近健康法として注目されているのです。先日某TV番組で、自宅のできる運動法として、大学教員監修の「まき割り体操」が紹介されていました。全身の血行促進が期待できるため、免疫力アップやダイエットにも効果があるそうです。その上、薪割りは義塾とも関わりがあります。『福翁自伝』によると、病がちになった福澤先生は、田舎士族の生活様式に戻し、米搗きや薪割り、散歩を日課としたころ、次第に身体が丈夫になったそうです。ポスト・コロナ時代、薪割りの教養学なども面白いかもしれません!
(文学部 徳永聡子)

